

〈修士論文要旨〉

子どもの「対人結合」を測定する投影法テストの 開発過程とその妥当性に関する実証的研究

— Bionによる原子価の再考 —

河原崎 聖 子*

I. 問題と目的

人間の行動や感情、心を捉えることはおおげさに表現すれば究極の課題であると言える。この、人間の行動や感情に見られる個人差を「性格特性」という概念で説明し、理解しようとする試みは、心理学において主要な研究テーマの1つであり、古く長い歴史を持ったものである。性格特性を理解する方法として挙げられるものに心理検査があるが、これらは市販されているものでも数多く存在する。筆者は、多くの心理検査のうち、他者との繋がりにおける性格特性に焦点を当てた文章完成法テストVAT (Valency Assessment Test) に着目して本研究を行うこととした。

他者との繋がりについてBionは化学から「原子価 (Valency)」という概念を用いて説明を試みた。これについてHafsiは、早期の対象関係の所産であると述べている。つまり、Kleinによって記述された早期の精神病的態勢、前エディプス、エディプスの体験を通じて対象との繋がり方を徐々に学んでいくという。Hafsiによれば、原子価が示されるようになるには、エディプスコンプレックスの後期から潜伏期の初期の間であると考えられている。しかし、この頃の原子価を測定する子ども用のテストは存在していなかった。

そこで、本研究では、Valency Assessment Test for children: VATch (Hafsi, 河原崎, 又吉ら、2004) を用いて決定された原子価が子どもの行動に実際に反映されているかという第1研究と大学生を対象としてVATとVATchの相関を行なうという第2研究から妥当性と信頼性についての吟味を行うことを目的とする。

II. 第1研究

1. 方法

1) 調査対象

第1研究における対象者は奈良大学附属幼稚園の園児76名と富田林市立新堂小学校の2年生123名である。

2) 尺度

第1研究では2つの尺度を用いた。第1尺度は子どもの原子価を測るテストVATch、第2尺度は幼稚園における教師から見た実際の行動を測る尺度である。

第1尺度のVATchはVATの子ども版である。グループ状況下で個人が他者に見せる反応を測定するテストであり、各個人の最も優勢な原子価（依存、闘争、つがい、逃避）を測定することができる。VATch、子どもに親しみやすい絵本形式で作成しており、動物たちが力を合わせてお菓子の家を作っていくというものになっている。物語中には依存、闘争、つがい、逃避、協同指標がそれぞれ2項の計10項がVATを基にした事項として含まれており、回答は、4択で行う。項目はランダムに構成されている。

第2尺度の実際の尺度はBionの理論を基に原子価が子どもの行動に反映されているかを測定するための尺度である。尺度は、依存項目6項、闘争項目9項、つがい項目6項、逃避項目6項の計27項で構成されている。内容は4つの原子価の性格的な特徴に注目し、質問項目として取り上げており、回答は5件法で求める。

3) 結果・考察

最初にVATchを用いて対象者の原子価の類型を決定した結果、依存64名、闘争36名、つがい45名、逃避29名の合計174名の各原子価の人数が確定した。

続いて、実際の尺度を用いてテストの吟味を行った。最初に信頼性を調べるため、Crombach alphaを求めた結果、 $\alpha = .731$ であったので、実際の尺度の信頼性が確認された。次に、実際の尺度の質問紙27項目を主成分法によって因子分析を行い、バリマックス回転後、4つの因子を抽出した。因子は、原子価の特徴を参考とし、第1因子を「つがいの行動」、第2因子を「依存的行動」、第3因子を「闘争的行動」、第4因子を「逃避的行動」とし、因子名を命名した。

最後に各因子について、原子価別の比較を行うため、一元配置分散分析（ANOVA）を用いて各因子の平均値と角原子価を分析した。各因子における比較の結果は、全ての因子において有意な相違が見られた。

以上のことから、それぞれの因子と原子価に有意な差がみられたため、VATchと実際の尺度の信頼性と妥当性が検証されたと言える。

Ⅲ. 第2研究

1) 方法

第2研究は、第1研究で用いたVATchに妥当性と信頼性が検証されているVATを加えて大学生に対しVATchを施行することで、双方の原子価の相関を求め、妥当性と信頼性の吟味を行うことを目的とする。

2) 調査対象

第2研究の対象者は奈良大学社会学部人間関係学科1回生の心理学実験受講者86名である。

3) 尺度

第2研究では、第1研究で用いたVATchにVATを加えて行う。VATは、Stock & Thelen (1958)が開発したテストを基にHafsi (1997)によって開発されたものを再度Hafsi (2005)が改正したテストである。内容としては、依存・闘争・つがい・逃避・協同指標がそれぞれ5項目の全25項目からなっている。

4) 結果・考察

最初に対象者の原子価の類型を決定するために、VATとVATchの各個人の原子価を決定した。その結果VATでは、依存56名、闘争13名、つがい13名、逃避4名の合計86名の各原子価の人数が確定し、VATchでは、依存23名、闘争15名、つがい35名、逃避13名の合計86名の各原子価の人数が確定した。

続いて、相関係数を調べる相関分析を行った。その結果、VATにおける原子価とVATchにおける原子価の依存、闘争、つがいにおいて有意な正の相関関係があることが認められた。また、逃避の原子価においては、相関関係が得られなかった。

以上のことから、依存、闘争、つがいにおいては相関関係が認められたため、VATchの信頼性と妥当性はほぼ検証されたと言えるが、逃避においてはデータ数が足りなかったこともあり、相関が得られなかった。

IV. 総合考察

第1研究では、園児と小学生179名の対象者のデータを用いてVATchの妥当性と信頼性の吟味を行った。今後は、対象者数と範囲を広め、より標準化されたテストの研究を行っていきたい。また、実際の尺度においては、原子価の特徴のみならず、他の性格特性の質問紙も参考にしながら新たに改正すべきところを整理していくことも必要であるだろう。更には、親の視点からの調査を行うこともよいと考えられる。

第2研究では、大学生のデータを用いて分析を行った。相関分析においては、逃避の原子価のデータ数が他の原子価に比べて少なかったため、逃避の原子価の相関が得られなかったのではないかと考えられる。今後は、データ数を増やし、それぞれの原子価のデータ数を平均的にして分析したい。

第1・2研究を通して、改善点や課題もあるものの、VATchの妥当性と信頼性はほぼ検証されたと言ってよいのではないだろうか。今後はVATchとVATを用いて、親の養育態度が子どもの原子価に与える影響などの親子関係に関する研究に対して、原子価という新たな観点から示唆することができるだろうと考えられる。